

榊原 洋一 (Sakakihara Yoichi) お茶の水女子大学教授

医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会常任理事。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞、二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授。

主な著書：「オムツをしたサル」（講談社）、「集中できない子どもたち」（小学館）、「多動性障害児」（講談社+α新書）、「アスペルガー症候群と学習障害」（講談社+α新書）、「ADHDの医学」（学研）、「はじめての育児百科」（小学館）、「Dr.サカキハラのADHDの医学」（学研）、「子どもの脳の発達 臨界期・敏感期」（講談社+α新書）など。

発達障害と保育

集団保育の場は、そこにいる子どもたちにとって、初めて経験する大勢の他人との生活の場でもある。家庭内での同じ価値観を持った人々に囲まれて育った子どもたちは、保育の現場で様々な異質の価値観も元に育った他人に囲まれた生活を始める。多くの子どもは、そこで社会のルール（規範）や、対人関係や集団内での行動の原則を学んでゆく。

しかし、一部の子どもたちは集団行動ができなかったり、基本的なルールの理解が困難であったりする。こうした子どもたちは、保育士にとって「気になる子どもたち」と呼ばれるようになる。

気になる子どもたちの特徴は、「落ち着きがない」「集団から離れがち」「教師の指示が通らない」「他の子どもと仲良くなれない」「集中できない」などである。

近年の乳幼児の行動の研究によって、こうした気になる子どもたちの多くが、発達障害と呼ばれる精神医学的概念に当てはまることが明らかになってきた。

発達障害の中で頻度の高いものは、注意欠陥多動性障害（3%）、学習障害（3%）、高機能自閉症・アスペルガー症候群（1%）であり、すべてを合計すると子ども全体の6%になることが、日本の文部科学省の調査で明らかになっている。

こうした発達障害の子どもたちは、知的障害はなく、通常の幼稚園や小学校に在籍している。発達障害は、育て方や教育の仕方によって生じる後天的な障害ではなく、すべて先天的な障害であり、その発生率に民族差はないことがわかっている。

その頻度が高いことから、日本では保育園や幼稚園の保育士、教諭は、発達障害についての深い知識を持つことが必須のことになりつつある。

講演では、発達障害の概念と、発達障害を持つ子どもたちへの対応の仕方や、幼稚園・保育園の環境のあり方（CCD）について述べる。